

## 十字架称賛

### 十字架称賛祝日のこと

ヨハネ福音書 3:13-17

（そのとき、イエスはニコデモに言われた。） 天から降って来た者、すなわち人の子のほかには、天に上った者はだれもない。そして、モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。

#### 説教

キリスト教の暦（こよみ）になじみがないと、きょう祝う「十字架称賛」の祝日がピンときません。わたしも教会暦が身についているというタイプではない普通の日本人なので、きょうの祝日の意味は調べるまでわかりませんでした。そこで、直接のテキスト解説からは離れるのですが「十字架称賛」祝日についての説明をいたします。

歴史的には十字架称賛（崇敬）は紀元4世紀の初めごろにキリストの墓の上に立てられた復活聖堂、現在エルサレムにある聖墳墓教会（せいふんぼきょうかい）の献堂の祝典に関連して定められたと言われていています。

伝えられているところによれば、ローマ皇帝コンスタンティヌスの母ヘレナが326年にエルサレムを訪れ、当時はヴィーナス神殿となっていたこの地で磔刑に使われた聖十字架と聖釘などの聖遺物を発見したとされ、ゴルゴタと比定した。神殿を取り壊して建てられたのが現在の聖墳墓教会である。教会の中の小さな聖堂がイエスの墓とされている。（ウィキペディア「聖墳墓教会」より引用）

エルサレムでは5世紀ごろから復活聖堂の献堂を記念する9月13日の翌日にキリストの十字架を礼拝する習慣がありました。しだいに東方教会に広まり、7世紀にはローマ教会（西方教会）でも定着し、祝日とされたといわれています。また、旧約聖書の祭り（祝日）に関連しているという指摘もあります。**第七の月の十日は贖罪日である。聖なる集会を開きなさい。あなたたちは苦行をし、燃やして主にささげる献げ物を携えなさい。**

**第七の月の十五日から主のために七日間の仮庵祭が始まる。**

**あなたたちは七日の間、仮庵に住まねばならない。イスラエルの土地に生まれた者はすべて仮庵に住まねばならない。（レビ 23:27,34,42）**

ユダヤ暦の「第七の月」とは今の9～10月にあたります。10日は「あがないの日」として、大司祭が年に1度至聖所に入り、契約の箱に犠牲の血を振りかけ、民の1年の罪をあがなっていました。また、15日からの1週間は「仮庵の祭り」としてエジプト脱出における神の救いのわざを記念していました。

新約ではヘブライ人への手紙9章で、キリストの犠牲とあがないの日の典礼を関係づけています。

**けれども、キリストは、既の実現している恵みの大祭司としておいでになったのですから、人間の手で造られたのではない、すなわち、この世のものではない、更に大きく、更に完全な幕屋を通り、雄山羊と若い雄牛の血によらないで、御自身の血によって、ただ一度聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられたのです。（ヘブル 9:11-12）**

福音書で「渇いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい」

（ヨハネ 7:37）とイエスが言われたのは、幕屋祭（仮庵祭）の折でした。

東方教会にはこの祝日にまつわる興味深い逸話が残っているので紹介します。

（ウィキペディア「十字架挙栄祭」からの引用、一部ことばをわかり易く変えています）

<十字架の発見>

コンスタンティヌス1世の母であるヘレナはかねてよりキリスト教徒であっ

たが、皇帝であり息子であるコンスタンティンがキリスト教を受ける決意を示した事に深く感動した。

太后エレナは救世主イエス・キリストが釘うたれた十字架を探し出そうと願い、総主教マカリイとともに長い間十字架を探した。年老いた一人のユダヤ人の案内で、ゴルゴタの丘と呼ばれた場所が判明し、そこにあった異教の祠を壊して地中を掘ると、三つの十字架が現れた。326年3月19日の事だったという。この三つの十字架のうち、一つは救世主イエス・キリストが掛けられたものであり、他の二つは盗賊が掛けられたものと推定されたが（福音書にイエスの左右に盗賊が十字架に掛けられたとの記述がある）、どれが主の十字架であるのか判らなかつた。

たまたま死者を葬るためにゴルゴタの傍らを通り過ぎる者がいた。総主教は彼をとどめて、死者の棺の上に三つの十字架を持って来させた。主の十字架が死者に触れると死者は直ちに復活し、病気の女に触れると直ちに全快したという。人々は大いに喜んでこの十字架を拝んだ。

あまりに多くの人々がここに押し寄せたので、総主教は皆がこの十字架を拝む事が出来るように十字架を高く掲げた。人々は皆、伏拝（ふくはい）し、感動して「主憐れめよ」キリエ・エレイソンと叫んだ。

太后エレナは十字架が発見された場所に救世主の復活を記憶する聖堂を建設し、十字架を安置した。エレナはその一部を採り、救世主の血の染みた釘とともにコンスタンティノーポリに持ち帰った。後代、その一部はロシアにももたらされている。

### <7世紀の逸話>

614年、ササン朝ペルシアのホスロー2世によってシリア、パレスティナが制服された際、聖十字架は持ち去られた。これに対し東ローマ帝国の皇帝イラクリイは622年から628年にわたってササン朝と戦争をし、首都クテシフォンにまで侵攻して勝利を収め、聖十字架およびその他のエルサレムの宝

物を奪還した。

皇帝はエルサレムに宝物を返納に赴き、総主教ザハリヤは民を率いてオリブ山の麓に皇帝を出迎えた。この時皇帝は金銀宝石で飾った衣を着、冠をかむりエルサレムに入ろうとしていた。皇帝自ら十字架を肩に荷い、まさにゴルゴタに至る城門に入ろうした時、十字架が神の力によって止められ進む事が出来なくなった。人々にはその理由が分からず大変驚いた。この時ザハリヤは雷のように輝く天使が城門に立つのを見た。天使を目撃したのは総主教ザハリヤのみであった。「我らの主は今、貴方達の持って来たようにしてこの十字架をここに持っては来ませんでした。」と天使は言ったという。総主教ザハリヤは皇帝に対し、「陛下、我々のために貧困に甘んじ苦難を受けられた救主が、謙遜に己れが肩に負われた十字架は、華やかで美しい衣を着て負うものではありません。」と言った。皇帝がこれを聞いて直ちに美衣帝冠を脱いで粗末な服を着、冠をはずして裸足となって十字架を背負うと、障害なく十字架を聖堂に運ぶ事が出来た。

総主教は元通りに聖十字架を聖堂内に安置し、人々は「主憐れめよ」と連呼した。

この逸話は、「主の愛はただ謙遜によって得られる事」「私たちが何事かを成すためには、まず光栄を主に帰し、自ら誇ってはならない事」を教えるものとして正教会に伝えられている。

7世紀のこの出来事をきっかけとし、それまで殆どエルサレムでのみ祝われていた十字架拳栄祭は帝国全土で祝われるようになった。

(引用おわり)

このような逸話が東方教会（日本では正教会と呼ばれています）には残っています。わたしたちも、きょうの祝日にあたり、改めてわたしにとっての十字架について思いを馳せる一日としましょう。

-----